第 5 章

日本語母語話者の英文表出プロセスを踏襲した文型練習

2．指導の実際

(2)ステップ 2：中間日本語を英語に置き換える(変換 3)

(ア)英語による記号化(P 77)

✧　日本語と英語の間に意味領域のずれがある場合に注意。

例：「今日の夕方、宿題を手伝ってあげよう」

×　I will help your homework this evening.

○　I will help you with your homework this evening.

✧　この段階では、各文型を作る代表的な動詞を選択して教材を作成する。

例：第 1 文型　talk, sing, come, live　第 2 文型　be, become, et, look

第 3 文型　have, live, know, enjoy　第 4 文型　give, tell, make, buy

第 5 文型　name, call, make, find

✧　1 枚に各文型をまんべんなく含むプリントを数種類つくって実施日を変えて繰り返し指導することで内容が定着する。

✧　より素早く判断する訓練を行うことでスピーキング力の向上に役立つ。

例：「彼は車を持っています(He has a car.)」

「私は既に宿題を終えています(I have already finished my homework.)」

「彼女は今テレビを見ています(She is watching TV now.)」

※すべてを進行形にしてしまわないように注意。

(イ)チャンクを拡大する

(ア)の練習で生徒が十分に習熟したら、日本語のチャンクを名詞節や形容詞節の後置修飾などを含む、より大きいものへと拡大していく。より情報量の大きい英文を作成できるようになる。

例：P79

(3)ステップ 3：改良型パターン・プラクティスで自動化を促進する(変換 2 と変換 3 を自動化へ近づける)

(ア)改良型パターン・プラクティス

これまでの練習をパターン・プラクティスにつなげる。

英語と日本語の意味の結合の不十分さを補うために、中間日本語または日本語でキュー(cue)を出す。

【パターン・プラクティスの 3 つの主要操作における注意点】

1．置換(substitution)

・チャンクを置き換えの単位とし、ただ単に同じ品詞の語句を機械的に入れ替えるのではなく、それらがコミュニケーションにつながる意味内容をもつように配慮する。

・文の要素 V における相、対、時制を表す言語形式とその違いによって生じる意味の変化は特に注意して指導する。

2．転換(conversion)

・文型は普通、平叙文の構造をもとに考えられているため、もとの例文から疑問文や否定文をつくる練習が必須。

3．拡張(expansion)

・より複雑な文構造と豊かで詳細な意味内容をもった英文をアウトプットできるようにチャンクを拡大していく練習が必要。

〈指導例(P80)〉

基本文を中間日本語で板書して、英語に直すようにクラス全体に発問。

口頭で正解が出たら、それを板書してスラッシュを入れて基本文のチャンクを意識させる。その後、キューを口頭で与えながら、正解の英文を板書していく。重要ポイントも説明。応用分の板書をすべて消して口頭のキューで、口頭の応用分を回答させる。

(基本文 1)私は/食べます/納豆を → I eat natto.

(基本文 2)私の父は/立っています/あそこで→My father is standing over there.

(イ)言語の機能との連携

実践的なコミュニケーション活動につながる英文の文型練習を、自然な日本語を使って全体をキューとして提示しながら徹底的に行う。(P81)

(基本文 1) 駅への行き方を教えて頂けますか。

Could you please tell me how to get to the station?

(基本文 2)今晩パーティに行きませんか。

Why don't you come to the party tonight?

(基本文 3)いつかスコットランドを訪れたいです。

I would like to visit Scotland someday.

※一つの機能に対して文型を固定せずに展開する方法もある。

例)依頼という機能について　→丁寧さの度合いによっていくつかの表現が可能(P83)

⇒文型ごとに行っていた練習を特定の場面や状況を前提として与えることで、より現実的なコミュニケーション活動の練習になる。

3．まとめ

≪ライティングだけでなくスピーキングにも対応可能な文型練習のポイント≫

① 文法用語を多用せず機能的に英語の文構造をつかませ、理解可能な英語をできるだけアウトプットさせるために、日本語をメタ言語としてではなく、中間日本語として有効に利用すること

② その際に日本語と英語の文構造の違いに着目させて 5 文型によってあたえられる英語の文構造に従ってチャンクごとに意味を感じながらアウトプットさせること

③ 言語の機能や使用場面にも配慮したパターン・プラクティスの改良型手法を用いて、各チャンクに助動詞や句や節を含むより複雑で情報量の多い文構造をアウトプットできる能力の獲得へとつなげること

目標言語(英語)による意味交換をすることで言語学習が促進すると考えられがちだが、実際の生徒がふれる目標言語の量と種類の少なさや母語(日本語)の干渉を考慮すれば、そうした授業で文法習得や語彙習得が可能になるとは言えない。口頭での日本語を禁じても、頭の中では日本語を使用している場合もあり、だからこそ、日本語を有効に活用して英語のアウトプット能力を引き出すことが重要である。

【感想】

中間言語としての日本語を利用する発想はとても面白かった。事実、日本人が英語を苦手とする理由はなにより英語と日本語の言語特徴の大きな違いが大きい。だからこそその欠点を利用する方法は有効であり、実際に練習してみて自然に英語が出てきたのでかなり効果のあるアウトプットの訓練方法だと感じた。